

御尤もとのみ申す可きもので、御説の中に是が間違であらうと存じます様なことは少しも見當りませんです。私共は出来る丈博士の御説の通り實行の出来る様に心掛けたいと思ひますし、人様にも同様に御勧めしたいと思ひますが、併し、之を若し信じ過ぎて、教育は耳からのみ入れさへすればよいと御考へになる方があるとすれば、それは由々しき僻事であらうと存じます。何故と申しますと昔からも、百聞一見に如かずと申して居る位で、いくら耳から入るものがあつても、若し目から入るものがなかつたならば、それは唯、空な觀念となるばかりで、一寸も實際と關係することがなく、遂には飛んでもない誤つた思想を持つ様になるだらうと存じます。元來、子供の脳中に入つて其資料となり知識の種子となるものは、何も耳ばかりに限つたものではなくて、心理學者の云ふ通り、是は矢張、凡ての感覺を通して入るに相違ないのでありますから、教育者は其積りで子供を指導して行かなければなりません。茲の道理を充分に承知して上の事ならば、前に掲げた某博士の御説は

大に味ふ價值があるものですが、若しさばせずして單に博士の説に呑み込まれて之を過信する方がありとしたならば大なる間違だらうと存じます。

## 個性の研究に就いて

湘 陽 生

此頃個性の研究と云ふことが、我幼稚園保育者の間に一つの流行となつて來た様で大阪方面からは其方法如何と云ふ様な質問が一二飛び込んで來た是は一寸返答に困る質問である。恐くは、斯る問を發する其人と雖も、若し、吾人が眞面目に答へたらば、きつと閉口するに違ひない。何となれば問が餘りに廣過ぎて、之を充分に説明すると共に殆んど心理學の大體を説明せざるを得ぬからである。吾人は斯る問題に熱中せらるゝ人に、先づ「兒童研究に連載せられたる文學士倉橋惣三氏の個性觀察法を讀まれんとを勧める然すれば個性觀察と云ふことが、何んな事であるかと云ふことや、其が直に保育者の參考になるのではなくて、直接に

は心理學者や兒童研究家の爲めに材料を供給するに止まるのであると云ふことが知れるであらう。勿論、今日の保母諸君の中にも専門的に心理研究又は兒童研究を自らせらるゝ方もあるかも知れん學識もあり素養もあつて、人の提出したる材料を批評し彙類し或は自から調査し試験して、以て歸納的研究を之に施すことの出来る人があるに相違ない。併し、其は大體に於て極めて少數であることと云はねばならぬ。概言すれば、一方に於ては實地保育者として兒童研究の結果を應用し幼兒教育を完全に施さんとするの實地家たると同時に、一方に於ては進んで益々研究に研究を重ねて新事實を發見し或は現在事實を證明せんとする所の研究家とを兼ねる熱心家もあるには相違ない。併し斯ることの出来る人は極めて少數である。悉くの保育者が悉く兒童研究家たる必要はない。尠なくも専門家としての兒童研究家たる必要はない。一般の保育者としては常識的に限られたる擔任幼兒教育に對して各幼兒の特性を承知して之に適當なる教育を施せば夫れで以て充分である。吾人は此意

味に於ては一般の保育者が同時に兒童研究家たりしことを認めなければ、近來一部の人の間に行はるゝ様な専門的研究を眞似して、直接の關係を専門家に求めて之を實地に應用せんことに於て大に盡くされんことを望むるのである。心理學者は自分の研究上實地教育者から材料を引き出さんが爲めに、色々のことを勧めるけれども、是を眞に受けてつまらぬ取調べをしたからとて、そが直に實地に應用さるゝ譯には行かぬ、勿論、之をする人自身が既に兒童研究をして見たいと云ふ希望の爲めにするならば、吾人も固より雙手を上げて賛成するに躊躇しないけれども、現在の如く、是が保母の職務上當然の仕事の様に考へて居る人があるとする、少し御氣の毒な感じがする予は保母諸君が今少し高手の態度に出でて、世の心理學者や兒童研究家から、其研究の結果を吸收することに努めて之を實地に應用することにして欲しいと思ふ。此點に於ては吾人はもつと世の兒童研究家を督勵する必要がある、實に現在の兒童

研究家と云ふものは、徒に机上の議論をする丈で一寸も實地の研究を進めて居ない。毎月の兒童研究が幾何の新研究を吾人に齎すかと云ふに殆んど零であるところも、差支ない位である吾人は我國の兒童研究家に向つて、大に奮起して貰ひたいと思ふ。

### 拙著幼兒教育法に對する

### 批評に就いて

和田實

吾人が幼兒教育法を公にしてより、茲に頃がても彼是一年に近からうと思ひますが、其間何處の方面よりも何等の反響もなく、會々口を開く人と云へば御世辭を振り蒔く様な人ばかりで、心に不満に堪へなかつた。殊に幼兒教育を以て畢生の事業とし、幼兒教育家を以て安心立命の地位とすと言言する人々が、然も一言の之に及ぶものがないのは如何にも残念なことである。我國の幼稚

園社會には吾人以上の經驗を持たるゝ人や吾人以上の見識を持たるゝ人が幾等もある。斯る人は何故に吾人の意見に對して其批評を發表せぬであらうか。是は誠に不思議なことであり、且つは我國幼兒教育界の爲めに遺憾なことである。何となればお互に意見を闘はし思想を交換してこそ學問の進歩と云ふものは見出されるものであるのに、斯様に會々問題を提出するものがあつても、更に論議しないこと云ふことでは、到底進歩とか發展とか云ふことは出来ないからである。然るに、本年八月十一日實に該書の出版を去る約十ヶ月にして、幼兒教育法に對する評論が時事新報の文藝週報誌上に表はれた。著者の一人にして且起草者たる余は驚喜の眼を以て之を讀過した。讀過して然して長大息せざるを得ない、教育家又は教育學者ならざる文藝記者すら斯程迄に吾人の著述に對して多少の意見を發表するものをも、幼兒教育界の一方に雄飛して幼稚園界の泰斗を以て自任せる人々は、なせ思ひ切つたる批評をしないのであらうか、吾人は實に不愉快に思ふ、何となく糠に釘、豆腐に鎚